

担当

競争原理の役割とその限界

競争原理を超えたインセンティブ

好奇心 使命感 情感性

雨宮 慶幸

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 研究科長 物質系専攻教授
あのみや よしゆき

国立大学が法人化されて4年目を迎え、それまで競争原理が働かなかった(？)大学に競争原理が明示的に働くようになった。大学間の競争だけではなく、一つの大学内における研究科間、専攻間、研究室間での競争的な雰囲気が顕著になってきた。具体的には競争的研究資金の獲得、優秀な学生の獲得、そして、研究成果のアピールにおける競争的な雰囲気である。

競争原理の是非については、様々な考え方があるが、私は競争原理は、切磋琢磨によって人間の能力を高め、ひいては社会を活性化する役割を有しており、社会に必要な原理であると考えている。スポーツでは勝ち負けが明確であり、それ故に、その中で人間は能力を最大限に発揮し、また、その過程を通して精神性を高め、強めることができる。私が学生の頃に一世を風靡した共産主義は、その妥当性がソ連の崩壊により明確に否定された。自由な競争を否定する社会においては、人々は勤労意欲を失い、非効率な事柄も放置されたままになり、そのような社会は自ら腐敗し、崩壊するということが証明されたのである。

このように書くと、私は競争原理の賛美者に思われるかも知れないが、私がここで問題にしたいのは、競争原理の限界性であり、その限界性を超えて機能するインセンティブの必要性である。

競争原理は、少し見方を変えれば、馬とニンジンの関係であり、ローマの奴隷制において奴隷を競わせ最大の労働を引き出すために用いられた原理に通じる。豊臣秀吉が用いた論功行賞も競争原理であり、一定の成果を収めた。しかし、晩年与える領地が無くなったことが朝鮮出兵に繋がり、彼の墓穴になった。このように、競争原理は負の側面を持つと同時に、その限界性を明確に知る必要がある。

「トップ5%の人材の資質は何か？」との問いに対して、カリスマ的ヘッドハンターと言われる人が次のように答えている。「“逆三角形”の下で組織全体を支え、自己犠牲をも辞さない志を持ち、皆の仕事をやり易くすることができる人です。」と。「収入が良くなる、出世が出来そう。」との動機で転職する人は、せいぜい上位20%の二流の人材だというのである。私はこの記事を見て、大変に感動した。使命感は競争原理を超えた上位のインセンティブである、と再確信したからである。

私は学生に対して、学生間の競争原理を特に鼓舞するようなことはしない。その代わりに、好奇心、使命感(Mission)、情感性(Passion)の重要さを力説している。その要点を以下に紹介させて頂く。

人間の心(精神性)には知・意・情の3つの機能がある。それは、「知性」と「意欲」と「情感性」である。何か物事に取り組むときには、これら3つを常に健全に活性化し続けること、さらにそれら3つのバランスを保つことが大切である。

一番目の「知性」。この重要性に関してはもう述べる必要性はないが、一つだけ補足すると、知性を健全に保つためには、「素朴な好奇心」が大切。そして物事を論理的にかつ実証的に考える習慣性を身につけることが大切である。

二番目の「意欲」。研究に取り組むとき、「好奇心」の他に、「何かのために役立ちたいという意欲」すなわち「使命感(Mission)」を持って取り組むこ

とが大切である。現代では死語になっている感があるが、所謂、世のため人のため、という使命感を自分の心の中に育てることが重要である。競争的研究資金である科学研究費補助金には、curiosity drivenなテーマの他に、mission orientedのテーマがある。この仕組みを見ても分かるように、研究を進める上で、「好奇心(curiosity)」と「使命感(mission)」は車の両輪である。

上述の「トップ5%の人材の資質は何か？」の問いに関連して、これからの社会で求められる真のエリートは、自分の利益を真っ先に求める人間ではなく、何かの為という大義の心をもって自己犠牲も覚悟で物事に取り組むことが出来る人間だと、学生に伝えている。

三番目の「情感性(Passion)」。これは、人や物事に対する愛情や素直に感動する心である。愛情とは平たく言えば、好きになることである。実は、この情感性は、好奇心や使命感を持続的に活性化するための極めて重要な要素である。

学問は歴史的には哲学、すなわち、Philosophyから始まった。Philosophyは、Phil-「親しむ、愛する」という語と、Sophy「知、または知識体系」という語によって出来ている。すなわち、知を愛することがPhilosophyである。また、日本にも「好きは物の上手なれ。」という言葉がある。何かを見て、あるいは知って、素朴に感動する心、この心(=情感性)が好奇心を刺激する。このように情感性は好奇心の原動力の役割を果たしている。

さらに、情感性は使命感をも強固にする。すなわち、社会に貢献しようとする使命感は、隣人や社会、さらには、人類や世界、に対する愛情があつてこそ、持続可能な使命感となり得る。また、自然、環境、地球星に対する愛情があつてこそ、環境問題への取り組み意欲も強いものとなる。

数年前に亡くなられたが、脳科学の研究の第一人者であった松本元博士は「愛は脳を活性化する。」という言葉を残している。博士は、事故で機能を失った脳も、人から愛情を受けることにより、その機能の回復が早くなるということを実証した。愛情を持って取り組むこと、また、愛情を受けることが、知性を活性化するということである。

現在は、国際社会でも国内においても、ますます競争の激しい環境になっている。このような競争社会で健全に生き残ることのできる人間は、逆説的だが、自分だけの利益に捕らわれず、人と物に対する愛情、すなわち「情感性(Passion)」をもって何事にも取り組むことの出来る人間だと確信している。

競争(Competition)のCを補うもう一つのC, Compassion(思いやり), を失わないことが、競争社会で健全に生きる上で重要であり、最後の勝者になる秘訣であると考える。

大学における競争的な雰囲気鼓舞は必要であろう。また、グローバル化する社会において競争原理は必要である。しかし、それ以上に、競争原理を超えたインセンティブを我々の心の中に作り出すことが重要である。「志の高い」人間、すなわち、競争原理を超えたインセンティブで行動できる人材を育てる「真なるエリート教育」の必要性を痛感する。このことは、最近よく耳にする「美しい国」、「美しい星」を実現するうえでも重要な事柄であろう。



筆者略歴

1974年 東京大学工学部物理工学科 卒業
1976年 同上 修士課程修了
1979年 同上 博士課程修了(工学博士)
1979年 日本学術振興会・特定領域奨励研究員
1982年 高エネルギー物理学研究所
放射光実験施設 助手
1988年 米国Brookhaven国立研究所
客員研究員
1989年 高エネルギー物理学研究所
放射光実験施設 助教授
1996年 東京大学大学院工学系研究科
物理学専攻 助教授
1998年 同上 教授
1999年 東京大学大学院 新領域創成科学研究科
物質系専攻 教授
2007年 東京大学大学院 新領域創成科学研究科
研究科長

主な要職、受賞歴

2001年 第1回日本結晶学会賞学術賞受賞
2007年 日本放射光学会・会長(-2009年)

専門分野: X線計測学, 小角X線散乱, 回折物理, 放射光科学

所属学会: (1) 日本放射光学会
(2) 日本結晶学会
(3) 日本物理学会
(4) 応用物理学会
(5) 日本生物物理学会
(6) 高分子学会